

## 年間第3 2主日C

ルカ 20・27-38

今日は、カトリック教会の復活についての教えを学びたいと思います。カトリック教会のカテキズム999号には「どのように復活するのか」という問いに対して、次のように教えられます。「キリストはご自分のからだで復活されました。『わたしの手や足をみなさい。まさしくわたしだ』（ルカ24・39）。しかし、この世のいのちには戻られませんでした。同じく、イエスにおいて『すべてのものは現在のそれぞれのからだで復活します』が、このからは栄光あるからだ、『霊のからだ』（Iコリント15・44）に変えられるのです」。また998号には「だれが復活するのか。死んだすべての人です。「善を行った者は復活していのちを受けるために」ヨハネ5.29)、悪を行った者は復活して裁きを受けるために」復活するのです。

使徒パウロは復活を信じない人たちに向かってコリントの信徒への第一の手紙の中で、次のように語っています。「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」（Iコリ15:12-14）。

今日の福音書の中で、イエスは死者の復活、つまり死後の天国での生活について語っています。私たちは天使のように永遠に生き、死ぬことのない存在になると言っています。ですから、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神」と語られたのです。私たちが今神の子であるのは、復活にあずかる者とされているからです。

復活は私たちの知性では理解できませんが、信仰によって理解することができます。

イエスの時代にも、ファリサイ派の人のように死後の生命を信じる人々も、サドカイ派の人々のように死後を信じない人々もいました。たとえば、サドカイ派の人々は、死者の復活さえも信じていませんでした。それだけではなく天使や霊も信じていませんでした。彼らは、旧約聖書の最初の五書（トーラー）だけを神の言葉として信じていました。

サドカイ派の人々は、復活を信じていないのにイエスに、7人の兄弟が次々死に、残された兄弟が同じ女と結婚したが、その兄弟も次々死んだ。最後にこの女も死んだら、「復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。（ルカ20・33）」と尋ねました。兄弟は皆、同時に同じ女と結婚したわけではありません。モーセの律法にあるように兄が死んだら弟が兄嫁と結婚してあとつぎを儲けなければならなかったのです。

イエスはサドカイ派の人々や律法学者たちにこう言われました。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使



に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」（ルカ20・34-36）。

つまり、復活の時、私たちは神の天使のように朽ちることのない「霊のからだ」をいただくのです。

聖パウロは死者の復活について次のように語られます。「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。」（1コリ15:42-43）。

皆さん、私たちは皆、死者の復活を信じているのではないのでしょうか。この地上での人生の終わりに誰もが復活することをわたしたちは信じているのではないのでしょうか。確かにその信仰をいただくために私たちは今日、このミサに参加しているのです。もし死者の復活の希望がなければ、聖パウロが言うように、すべてのことは無駄なことです。虚しいことです。私たちは隣人に対して善を行い、愛し、仕える必要はないのです。もし死者の復活の希望がなければ、私たちは神のため、そして他の人々のために自分の命を犠牲に捧げる必要はないのです。

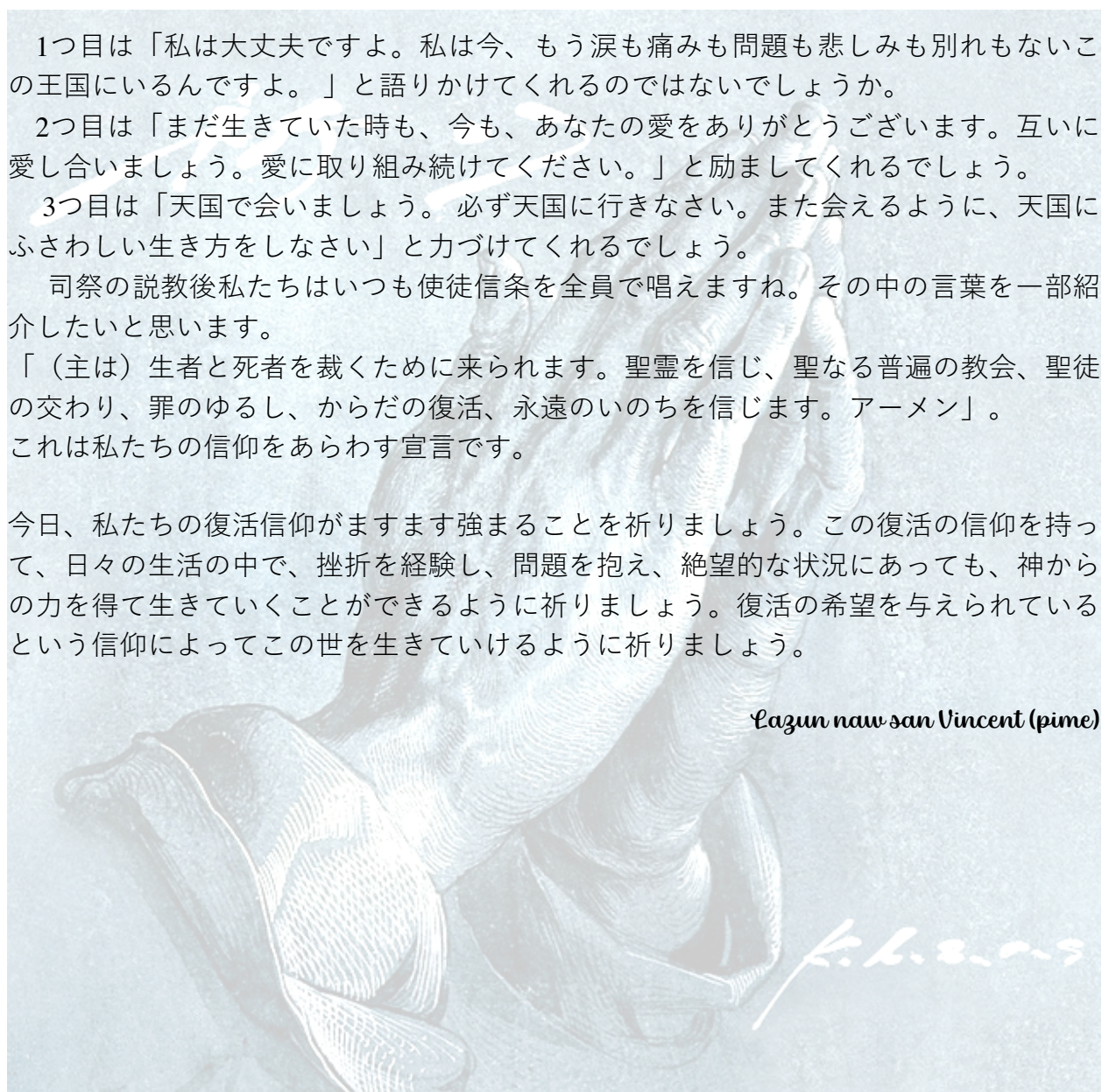
皆さんもご存知のように、先週の火曜日は諸聖人の日でしたね。聖人の中には、死や拷問に直面しながらも、信じがたいほどの信仰を示した殉教者もいます。もし死者の復活がなければ、「**信仰**」は無駄なことです。私たちが祈る必要はないでしょう。日曜日に教会に行く必要もないでしょう。

世界の平和と正義のために働く必要もないでしょう。そして、教会のすべての宗教活動に参加し、秘跡を受ける必要もないでしょう。しかし、イエスは、復活され、すべてのことは無駄でないことを示してくださいました。

私たちは死からよみがえる前に、死を通過しますね。もし私が、皆さんに次に死ぬのは自分だと志願する人がいますかとたずねれば、誰か手をあげる人がいますか。99.99%の人は手を上げないでしょう。また、愛する人の死はどうでしょうか。死は大きな喪失です。大きな悲しみです。この喪失と悲しみは神に委ねることあります。

私たちは最後に死に直面したとき、私たち自身と私たちの心の中で大切にしている人々が神のものであることを受け入れなければならないのです。大切な人が先に逝ってしまったら、私たちは泣きますよね。私たちはその死をどのように考えたらよいのでしょうか。でも、もしその人が復活するという信仰をわたしたちが持つことができれば、その死の受け止め方は違ってくるのではないのでしょうか。そのこと考えるを手がかりとして、先に天に召された人々がわたしたちに語り掛けてくれると思われる、3つの言葉を紹介したいと思います。





1つ目は「私は大丈夫ですよ。私は今、もう涙も痛みも問題も悲しみも別れもないこの王国にいるんですよ。」と語りかけてくれるのではないのでしょうか。

2つ目は「まだ生きていた時も、今も、あなたの愛をありがとうございます。互いに愛し合いましょう。愛に取り組み続けてください。」と励ましてくれるでしょう。

3つ目は「天国で会いましょう。必ず天国に行きなさい。また会えるように、天国にふさわしい生き方をしなさい」と力づけてくれるでしょう。

司祭の説教後私たちはいつも使徒信条を全員で唱えますね。その中の言葉を一部紹介したいと思います。

「(主は) 生者と死者を裁くために来られます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン」。  
これは私たちの信仰をあらわす宣言です。

今日、私たちの復活信仰がますます強まることを祈りましょう。この復活の信仰を持って、日々の生活の中で、挫折を経験し、問題を抱え、絶望的な状況にあっても、神からの力を得て生きていくことができるように祈りましょう。復活の希望を与られているという信仰によってこの世を生きていけるように祈りましょう。

*Lazun naw san Vincent (pime)*